

---

# IS 転生して貰ったのは！？

マーシィー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 転生して貰つたのは！？

### 【NZコード】

N8610Y

### 【作者名】

マーシー

### 【あらすじ】

一次創作が大好きな青年がISの世界に転生！？おまけで貰つたのは青年が大好きだつた一次創作に出てくるオリIS。これで原作介入だ！！……そんな風に考えていた時代がありました。ISチートは隠すものの派生作品として書いて見ました。

## その1（前書き）

元々は息抜きで書いていたのを連載して見ただけなので一話一話は短いです。

初めまして。俺の名前は 一一三 ひふみ 四五六 じゅく。<sup>だ。</sup>

俺の事を簡単に説明すると転生者と言つ奴だ。俺は死ぬ前は一次創作が大好きで暇さえあれば色々な二次創作を読み漁つていた。

その中で I.S. インフィニット・ストラトスと言つラノベを題材にした小説が大好きだった。俺はいつも I.S. を題材にした小説を読みながら、俺だつたらこうする、此処はこういう行動で、俺の専用機は、などと妄想ばかりしていた。

中でも I.S. チートは隠すものに出てきた「八卦龍」と言つオーリエスが大好きだった。

元はゼオライマーと言つアニメが某ロボットショミレーションに出てきた時、そのゲームのためだけに書き降ろされ、出てきた機体をこの作品の作者が弄つて作り出した機体であり、そんな機体に俺は心を引かれた。

いつも俺は妄想の中でこの機体を使って I.S. の世界で活躍することを考えていた。そんな事を常日ごろから考えていて、つい考え事、いや妄想に浸つていたら俺は死んだ。交通事故で。

何のこととは無い妄想に集中していたせいで信号が点滅していたにも関わらず歩道に出てしまい近くの工事現場に向かっていたロードローラーに轢かれてしまった。

なんていう間抜け。自分でもコレは無いと思つた。

だが、俺は死んで意識を失ったはずなのに気が付くと赤ん坊になっていた。その時、俺が思つた事は混乱したり訳が分からなくなつたのではなく、ただ

### （テンプレキター）

と思っていた俺はダメ人間だったと思う。

さて、そんな風にテンプレなのがそれともそれ以外なのかは知らないが俺は赤ん坊からやり直し体を自由に動かせる用になつた頃、俺の玩具箱（両親が与えてくれた）の中に”ハつの球体”が着いたアクセサリーが入つているのに気が付いた。

俺がコレを手に取つた時、頭の中にある知識が流れ込んできた。

それは紛れも無くISの知識であり、そして俺が大好きだった「八卦龍」の知識だった。

俺はこの「八卦龍」を手に入れたという事実に驚愕し、次に感動しているかどうかも分からぬ神様に感謝した。俺が大好きだった「八卦龍」をくれてありがとうございます、と。

そして、この「八卦龍」を手に入れたことによつて、この世界がISの世界であることに気が付き、前世から思つていた原作介入をすると決めて、原作ヒロインを彼女にするぞ、と意気込んだ。

……そんな時代がありました。

俺は「八卦龍」を手に入れた事とテンプレ的な転生をした事についてある事を忘れていた。

「八卦龍」は元となつた小説内で世界経済を牛耳つていると云つても過言ではない「世界電腦」が総力を挙げて作り出した機体であり、その技術力は小説内では世界一位であり篠ノ之東博士をも上回る技術力が使われた機体で有る、といつ事を。

つまり何が言いたいかと言つと、この「八卦龍」

整備、補給、その他もろもろが出来ない、と言つ事だ。

しかも、この「八卦龍」を手に入れた時、世界ではまだISは発表されていないので俺がISを持つていてる事自体がおかしい事であり、しかも「八卦龍」に使われている技術はどれをとっても原作内の技術力を上回っているので、下手にこれが世界にばれたりしたら、冗談抜きで世界中から、狙われる事になる。

テンプレで転生してオリISも手に入れて原作介入だ！…と思つたら、ばれたら命を狙われかねない状況だつた。

どうしよう（笑）

## その2

皆さんこんにちは。オリ主の四五六です。

Q さて、今俺がいる場所は何所でしょう？

A I.S学園内1年1組

そう、原作主人公、織斑一夏がいる1年1組の教室内です。なぜ、俺が此処にいるかと言うと、ええ。そうです。俺がI.Sに乗れるという事がばれました。

理由としては簡単な事で、一夏がI.Sに乗れる、という事が発覚してから世界中の国で男性を対象とした適性検査が行なわれたからです。で、それに見事引っかかったのが俺、と言う事だ。

事前に対応しておけばよかつたんじゃないか？と思う人も居るかもしれない。

だが、考えて見てくれ。

俺が手にした物は「八卦龍」「だけ」である。

I.S関係の知識や技術なんていうものはないのである。つまりはI.Sに乗れる事を隠す方法を知らないという事で……

あ、でも「八卦龍」自体は乗りこなせるだけの技量は有つたみたいで、今ではキノ以上に扱える自信があるぜ！でもGN様に乗ったキノには勝てる気がしないがな！！

さてそんな風に考え方をしていたら原作であつた織斑姉弟のやり取りが終わり、俺の自己紹介になつた。

「はじめまして。漢数字で一二三四五六と書いてひふみじごろ、と言います。好きな事は一人でいること、音楽を聴くこと、嫌いな事は、不特定大多数人が居る場所にいること、勝手に物事を進める人です。ISになぜか適正があり、この学園につれて来られました。ISの”知識”に関しては何も知らない素人なのでいろいろ足を引っ張ると思いますが、よろしくお願ひします」

そういう言つて頭を下げ席に戻る。クラスの反応はまあ、ぼちぼちと言つたところだ。

ちなみに俺の見た目だが、銀髪に赤と青のオッドアイで顔つきもかなり整つてゐる。下手なモデルよりかはかなりカッコいいと言つてもいいぐらいだが、正直いらないです。

こんな中一病な姿で名前は漢数字オンラインで似合わないにも程があるだろう。

なので、学校に来る前から髪は黒に染め黒のカラー・コンタクトをつけ、地味な黒ぶちメガネをかけて地味な格好をしています。

おかげでクラスの女子の殆どは一夏に興味がいつている様で何よりだ。

俺は確かに前世とこの世界に生まれた直後はハーレムだの原作ヒロインを恋人にだの思つてゐたが、それはあくまでもそういう風に考へてゐる事自体が楽しかつたのであり実際に目の前にヒロイン達

がいたら、恐縮して何も出来はしないのだ。

チキンだのヘタレだの大いに結構！！

俺は物語を脇から見ている傍観者になりたいのだ！！

まあ、「八卦龍」の事がばれて命を狙われたくないって事もあるがな！！

## セの3（前書き）

「この作品のヒロイン登場人物一覧

自己紹介が終わり、授業が終わり、休み時間となつた。

一夏は早速、俺の所に来ようとした所を篠ノ之簾に呼ばれ、廊下に出て行つてしまつた。つまり教室には俺一人になると云つわけで。

正直、キツイです。いろんな意味で。

今俺は地味な格好をしているせいに余計にキツイです。何がつて、周りの囁きが。

「あの人? 一人目の男性適合者つて」

「……なんか地味だね」

「織斑くんはかっこよかつたのにね~」

そんな感じの囁きが周りから聞こえてくる。

耐えろ、耐えるんだ俺。此處でこの囁きに負けて変装を解いてしまつたら、大変な事になる。地味でいいんだ。地味で。このまま俺は地味に過ごしていくんだ。厄介事は一夏がきっと何とかしてくれるはずだ。

そんな風に心の中で葛藤していたら、やつてきました。厄介事が。

「ちよつと、よろしくて?」

チヨロコット、もといオルコット嬢が。

「なんですか、えつと……チヨロコシト? れん」

「だ、だれですかチヨロコシト? セシリア・オルコシトですか  
オ・ル・コ・シ・ト」

「やつでした。すみません。オルコシトさん……で、何か用ですか  
?」

「全く、コレだから男と言つ物は……ハツ、コホン。用と言つのは  
……」

キーンローンカーンローン

「「あ」」

用件を言おうとした時に授業開始の鐘がなる。

「い、今回はコレまでにして差し上げます」

やつこつこそそくわと席に戻るオルコシトさん。

(なんといつ小物臭w)

そして授業が始まる。その後はまあ原作と同じ様な展開で終つた。オルコシトさんは先ほどの事で話すタイミングを見失つたようで今日は話しかけてこなれそつだ。

そして放課後。

「織斑君に一一三君いますか?」

山田先生が俺達を探していた。

「何か用ですか、山田先生？」

「あ、一一三君。織斑君は見ませんでしたか？」

「いえ、見てません」

「そうですか。では先に一一三君に渡して置きまわね

山田先生から渡されてのはカギだった。

「……ああ。寮のカギですか」

「はい。そうですよ。一一三君のルームメイトは1年4組の子になりますから仲良くしてくださいね」

「はい」

山田先生と別れ、寮の部屋へと向かう。

「此処か」

とりあえずノックをしてみる。

「誰か、居ますか？」

「…………はい」

「今日からこの部屋のルームメイトになつた者ですが」

「…………どうぞ」

はて？何所かで聞いたような声だが、誰だったかな？

「では、失礼します」

そして入つた部屋に居たのは

「…………誰、貴方」

メガネを掛けた青髪の少女だった。

今俺の田の前に居る」の女性。

名前を更識簪と言ひへ。

原作では彼女は自分ひとりの手で「打鉄式式」という式を作ろうとしていた人物である。彼女も原作では一夏ハーレムの一員となるようだが、まさかこんな所で原作ヒロインに会つことになるとは。しかもルームメイトつて……

「あ～山田先生に聞いてないかな？ 今日からこの部屋のルームメイトになる――三五六だが

「……そういえば、そうだつたかな」

「では、改めて血口紹介をしよう。俺は漢数字で――三五六と書いてひふみじいひつて言つんだが君の名前は？」

「……更識簪」

「更識簪ね……では更識を「田字で呼ばないで」……では簪ちゃん」

「なに？」

「とつあえず、これから一緒に部屋で生活する事になるのだが、いろいろと決めておこうと思うのだが。シャワーの順番とか」

「……分かった」

それからしばらくの間一人で順番とか、細かい注意点を聞いたら  
したりしてその日は終った。

え、隣に女性が居るのに寝れたのかつて？

ハハハ。紳士である俺に彼女に何かするなんて事出来るわけない  
だろう。

……すみません。嘘つきました。本当は彼女の姉が恐くて何も出  
来ませんでした。

彼女の姉である更識樋無は原作キャラ内では上位の腕前を持つ工  
S乗りである。さらに対暗部用暗部、「更識家」の当主でありその  
人脈や情報網はかなりのものらしい。ついでにシスコン。

そんな姉を持つ彼女に対して何かして見ろ。物理的、社会的に消  
されてしまうわ！！シスコンモードでブチぎれた樋無さんに相手に  
したら「八卦龍」でもきついわ。ギャグ的な意味で。

さて、次の日になり朝、まだ布団の中に居る簪さんに軽い挨拶を  
してから食堂で朝食を取る。

今日のメニューは白米に鮭の塩焼き、味噌汁、おひたし、卵焼き、  
納豆、飲み物に牛乳をチョイスした。ちなみに食堂が空いた直後ぐ  
らいに入ったので周りには殆ど、と言づか俺以外に誰も居ない。

食後、一度部屋に戻り教科書類を持って教室に向かう。

簪さんはまだ寝ぼけてたのかボーッとしてた。

教室で、一人教科書を開き予習をしている俺。実際はこいつそりと「八卦龍」を使いこの学園内にあるパソコン類にハッキングをかましていること情報収集している。まあ、殆どを「八卦龍」に搭載されているAI、MIKUにしてもうつっているけど。

そんなこんなでいろいろ足跡がつかない程度に情報を収集していたら、誰か教室に入ってきた。

「いつちばーんつてあれ、——三三君、もう来てたの」

「ええ」

「来るの早いんだね」

「朝は強い方なので」

そんな風に簡単に会話をしていたら続々とクラスメイト達が来てまあ似たような反応をしていき、最後になにやら慌てた様子で、一夏と篠が入ってきて授業が始まる。

授業中も「八卦龍」による情報収集は怠らない。何時トラブルに巻き込まれ、「八卦龍」の事がばれるか分からないのだ。

それに、極々最近ながら「八卦龍」に関してとても重大な事が判明した。正直知らなかつた方がよかつたことである。

この「八卦龍」正確にはISではないのだ。ISの機能を持つた別の機体なのだ。

つまり、この「八卦龍」の情報の中にTTSと同等の性質、機能を持ち量産が可能で性別による適正が無い「アの情報も含まれているのである。

……眞面目にこの「八卦龍」の情報が外に漏れでもしたら第三次世界大戦が勃発しかねん。

チートHISと思っていたのが実は特大の地雷だった。

## セの5（前書き）

作者はオルゴットは嫌いじゃないよ。

ただ書いてるだけにいりなつちゃつんだ。

今俺の田の前では原作最初の見せ場？の切欠となるイベント、そ  
うオルコットさんの女尊男卑発言をリアルタイムで聞いてます。

「～としても後進的な国にいる」と事態、わたくしにとつては耐え  
難い苦痛で～」

「イギリスだつてたいしてお国自慢ないだろ！！世界一まずい料理  
で何年覇者だよ！！」

「な、何ですって！～！」

原作と同じくクラス代表を決める話が出た時、推薦が一夏にしか  
出なかつたことに腹を立てたオルコットさんが原作通りの発言をして  
一夏が切れた、と。

ちなみに俺の名前は殆ど出でいません。

フフフ、このために地味な格好と地味なオーラを出して目立たな  
いように人の目線に入らないように過ごしてきた甲斐があつたもの  
だ。今では俺の事など「そういうえば居たよね」程度しか認識されて  
いないのだ。

フハハ！！これで原作キャラとの邂逅は無くな「ではクラス代表  
を決める模擬戦はオルコット、織斑、一三三の三人で試合をしてそ  
れで決めることにする」つた……え？

「フン！無様に負けるがいいですわ！！」

「それはこっちのセリフだ！！」

「まじめーがーまー

卷之三

織田先生 どうして事ですか 俺も模擬戦は出でて!!!!

何を言っている 貴様も推薦されたたゞ二三?

たがうて いくなんても無理があるでしょ

一夏みたいに専用機を与えられるわけでもないのに代表候補生と戦えつていいくらなんでも無茶すぎるだろ？」「八卦龍」は使えねーんだぞ！！

「これは決定事項だ、腹を括れ」

そういうて出て行つてしまつた織斑先生。ねーよ、マジねーよ。  
せつかく地味に過ごしてきただのにこれはねーよ。

「四五六、そんなに落ち込むなよ。アレだけ言われたんだ、このまま黙つてられないだろ」

「織斑さんはまだ度胸がある方ですのに――さんは情けない事ですね」

とにかく一人が言つてゐるが、こいつら今の自分達の立場と状

況が分かってねーのか！？

「一人とも、今回の模擬戦がどういう状況になつてるのか理解して  
るのか？」

「どうゆう状況つてなんだよ？ただクラス代表を決める試合だろ」「  
何を仰つてるのかしら。まあ結果の見えた試合で……」

「……今回の模擬戦、下手するとイギリスと日本の関係が悪化する  
んだぞ」

「「「「え？」」「」」

俺の発言に一人だけではなく、話を聞いていたクラスメイト達も  
声を出して不思議がる。

「ど、どういう事ですか、関係が悪化するつて……」

オルゴットが息を荒げて言つてくる。

「オルゴット、この模擬戦が決まる前に一夏に対してなんて言つた  
か覚えてるよな？」

「それがどうしたつて……」

「極東の島国、野蛮な猿の国、後進的な国等々そんな発言したよな  
？」

「ええ、言いましたわ」

「……その発言が一夏と一人だけの時に言つたならともかく、いやそれも問題だが、そんな発言をよりもよつて授業中、しかもコレだけの人数が居るところで発言したつて事は、その発言はオルコット個人の発言ではなく、イギリス代表候補生としての発言として取られても反論できないんだぞ」

「四五六、それがどうしたつていうんだよ」

「……代表候補生の発言、それはその国の発言として取られてもおかしくはないつて事だ。つまりイギリスは日本の事を野蛮な猿の国で後進的な国である、と宣言した、と取られてもおかしくはないんだよ」

其処まで言つてオルコットは自分がどういつ発言をしたのか理解して青ざめてた。

「今の世界情勢で日本と言う国がどういつ意味を持つか分かるだろう一夏」

「それは……」

「ISを開発した人物は日本人、最強のIS乗りも日本人、ついでにIS学園の生徒も半数は日本人。こんな状態でみんな発言をしたら、どうなるか一夏お前でも分かるだろう」

「……」

何もいえなくなる一夏。だが、まだ終らない。

「アレだけでもヤバイのにまだあるんだぞ」

「まだありますのー?」

かなり顔色が悪くなっているオルコットが叫ぶ。

「オルコット、お前が発言した言葉をぶつけた相手の名前を言つて見ろ」

「相手の名前? 織斑一夏……」

「分かったな? 織斑一夏。つまり世界最強のIS乗りである織斑千冬の実の弟である相手に野蛮だの猿だの言つたんだ。しかも一夏は世界初の男性IS適合者。そんな相手にアレだけの発言をしたんだ。どう見繕つてもイギリスと日本の関係が悪くなるのは必須。」

もう顔色が悪くなりすぎた青から白くなってきたオルコット。

「ついでに織斑千冬と織斑一夏の一人はISの生みの親篠ノ之束博士に気に入られているらしいじゃないか。もし今回の事が束博士に聞かれて機嫌を損ねるようなことになつたら、下手するとイギリスが保有しているISコアだけ機能停止させられるかもしれないんだ。今のご時勢、国がISを使用できない事がどういう事になるかなんてISに関与した人間なら分かるだろう?」

其処まで言つたらオルコットはぶつ倒れた。

「ちょ、オルコットさんシツカリしてー!」

「だれか!衛生兵!衛生兵!..」

教室内は阿鼻叫喚の状態になってしまった。やりすぎたか？

オルコットさんと一緒に今回の試合がどうじう事態を招くか言って見た次の日から、オルコットさんに親の仇かの要な目で睨まれてます。

何故俺を睨む。

それはさておき、今は今回行なわれる試合で俺がどうじう風にするかを考えなければ。

原作では一夏が一次移行するまでの間ひたすらに避けて一次移行した後後一步まで追い詰めるもエネルギー切れで負ける、と言う展開なのだが其処にもう一人の人間が入ると話しさは変わってくる。

俺に専用機を～と言つ話は上がつてきていないのでつまり量産機で相手をすることになるのだが、まあ八卦龍でひたすら鍛え上げた俺なら量産機でも専用機持ちに勝てる自信はある。あるのだが、そんな事はまず出来ない。

なぜなら、そんな事をしたら確実に面倒な事に巻き込まれる。

IS起動回数や機動時間が優に三桁を越えているような代表候補生に対して公式ではIS起動回数も起動時間も一桁に届かない素人である俺が初の試合で余裕を持って専用機持ちの代表候補生に勝ちました～なんてできねえよ。

そんなことしたらマジでやばいよ。政府に目を付けられるし、此

処の生徒会長にも絶対田を付けられるよ。ただでさえ妹さんと一緒に部屋の時点ですでにヤバイのに……。となると負けるか引き分けにするかなんだが、引き分けもまずい気がする。だから此処はワザと負けるしかないか。しかもすぐ負けるのではなくそれなりに戦つてから負けないと今後の生活に支障がおきかねんからなー。

めんぢくわーー！

そんな風に考えてたら昼になつた。ので一夏に声を掛けられる前に教室から離脱、そしてM・E・K・Uの情報から人が少ない場所でせつさと弁当を食べぐる。

「この弁当は俺お手製の弁当である。一度田の人生はこうこうとして見たかったので料理をし始めたからついつい夢中になつてしまい、なかなかの腕前になつた。

ちなみに同じ部屋の簪さんのも一緒に作つてある。

なぜかつて？簪さん、食生活がかなり不摂生なんだよ。なんだよ、食堂で食事をするのは数日に1、2回それ以外はカロリーメ〇トとビタミン剤つて。女子の食事じゃないだろ。

それを見かねた俺が注意したら、「……其処まで言つなら貴方が作つてよ」等と言つから、ええ。作つてやりましたとも。栄養バランスはもちりん見た目の配色、じ飯とおかずのバランスなど考えつくしたお弁当を毎日作つて渡してやりましたとも。で、簪さんも俺のお弁当は氣に入ったのか今はお昼のお弁当はシッカリと食べるようになりました。

あれ、コレって餌付けしてる？

## 裏 その1

先日から私のルームメイトになつた世界で一人目の男性 I.S 適合者である一一三五六。

かなり珍しい苗字と名前の彼だつたけど、はじめて見た感想は地味。その一言に留めた。

始めてあつた頃は殆ど興味なんて無かつた。私は“この子”を完成させる事だけを考えていたから。

それからしばらくの間私たちは殆ど会話をし、会話をせず、同じ部屋に居るだけの他人、そんな関係だつた。でもある日、彼が私の食生活について質問?をしてきた。

「簪ちゃんはいつもそんな食事してるの?」って。

その頃の私の生活は授業以外は殆ど部屋に籠り、パソコンのモニターに「写る“この子”」の事だけを考えていた。だから食事は殆ど携帯食糧とビタミン剤で済ませてた。食堂では数日に1、2回しか利用してなかつた。

そんな風に言つたらすぐ怒られた。やれ、「女の子がそんな食事では~」とか「成長期に~」とかクドクドと言われた。

そんな彼に私はつづとおしく感じ、「……其処まで言つなら貴方が作つてよ」と言つてやつた。いつも言ふば料理も出来ないくせに私の食生活に口出しできないうだろつと思っていたのだけど、次の日、私の目の前にはかわいらしい模様の布で包まれたお弁当が置いてあ

つた。

そのお弁当を前に彼はどや顔で立っていた。地味だけど。

流石に実物を出されてはしじょうがないと取り合えずその日はそのお弁当を持って授業に向かった。

そしてお昼の時間。私は人通りの少ない場所で彼のお弁当の中を見て驚いた。

失礼だけど彼の見た目からは想像できないほど美味しそうなお弁当だった。見た目の配色に栄養バランスの考えられたおかず。全体の量も私にぴったりの量だった。

味の方もかなり美味しくて気が付いたら綺麗に食べ終わっていた。

その日の夜、彼は何所と無くわくわくした表情で私にお弁当の感想を聞いてきた。

何か癪だったから「……まあまあ、だつたよ」と言つたら、「なら美味しいって言つまで作り続けてやる」と言われ、その言葉通りに次の日から私のお弁当を彼が作ってくれるようになつた。

癪だけど、彼が作るお弁当は毎回毎回美味しい物ばかりで、気が付いたら私はお昼のお弁当の中身を楽しみにしていた。

アレ? 私餌付けされてる?

## セセセ（前書き）

「」の作品内ではこの「」都合主義が発生しております。  
どうか温かにアドバイスください。

さて、今日遂にクラス代表決定の試合が行なわれる事になる。

アリーナ内は何所からか聞きつけてきた生徒で埋め尽くされていた。

「……で、一夏。お前の専用機は？」

「……まだ、来てない」

原作通り一夏の専用機はまだ来ていないようだ。つまり

「仕方が無い。一一三、先に試合をしておひり」

「ひりなる。

「……ハア。分かりました」

「四五六、がんばれ！！」

一夏が応援してくれるが、こつなったのはお前が原因の一つって分かってるのか？

ちなみに俺が使用する機体は「ラファール・リヴァイヴ」。量産機の中で最も多くの武器を使用できる事からこの機体を選んだ。

フフフ、見ているがいいセシリ亞・オルコット。俺が対ビット兵器用戦術を見せてやる。

「よく逃げ出さずに来ましたわね」

「……ハア。逃げるも何も出来るわけないだろう。そんな事」

「ファン！ 」 これだから男と言う生き物は〜」

いや時間押してるからせりふと始めない?」

## 開始のブザーが鳴り響く。

—そして貴方の敗北で終わりです！！

その言葉と同時に放たれるビーム。その行動に俺は

二二

放たれたヒーリングの斜線上にアモリケケレボートを投げ込んだ

な！ 煙幕！ ？

結果。アリーナ内に灰色の煙が充満する。とは言えスマーキングレンード一つでアリーナ内が煙で埋め尽くされるわけも無いので俺はさらに追加で3、4個四方に投げる。

「煙幕で目を暗ましたところで私には勝てませんわーー！」

「でも攻撃も出来ないでしょ」

「う」

数メートル先も見えないほどの濃度となつた煙の中では流石に不利と悟つたのか煙の外に離脱するオルコッシュ。

「ハツハツハ、すぐに終らせんじゃなかつたのか」

「馬鹿にして……」

だが、煙幕の外に離脱したとは言え相手は未だに煙の中。いくら射撃が得意と言つても煙の中見えない相手に闇雲に攻撃するわけにも行かず歯がゆい思いをする。

「卑怯者……男なら正々堂々戦わないのですか……！」

「え～。女尊男卑思考の貴方がそんなこと言つてもねえ」

「くっ」

「それに“IS”起動回数も機動時間も三桁越すような人に起動回数、起動時間共に一桁に届かない素人に真正面から戦えとか、鬼畜過ぎるだろ」

そう。原作でも思つたがさつき言つたとおり素人が代表候補生相手に真正面から戦いを挑むとか無理がありすぎる。まあ、そんな事を言い出したらいろいろ台無しだが。

ちなみに起動回数、機動時間共に一桁に届かないって言つのは

本当だよ。

「八卦龍」は？

いや、アレは厳密にはエリジヤないからいいんだよ。だから“エス”の起動回数、機動時間に対して嘘は言つてない。嘘はね。

（全く、男と言う生き物はこれだから嫌いなのです！…でもこの煙幕も時期に薄くなります。その時が貴方の最後に……）

「ちなみに俺のスマートクグレネードは108式まであるぞ（笑）」

「へ？」

その後、オルコットは煙幕の周りをうろつきながらなにやら騒いでいたが、俺は無視して煙幕が薄くなつてきたり、3個放り投げ濃度を濃くしていった。

「フフフ。これこそ対ビット用戦術、「相手が見えなければビットで攻撃できなくね？」だ！！

いかにビット兵器による全方位からの攻撃といえど相手が見えなければ攻撃できまい。まあ、俺も相手が見えないから攻撃できないけど。

地味？卑怯？フハハハ！！俺の目的は時間稼ぎだ…それに勝つ氣など無いからこれでよいのだ――――――！

20分後

アリーナ内外はなんと云つか白けた雰囲気が漂っていた。だが、それでいい。俺の試合がしょぼければしょぼいほど一夏の印象が強まり、俺に対する印象は低く薄くなっていくからな――

「……あ。山田先生」

「ふえ、な、なんでしょう

「スマートグレード無くなつたんで棄権します」

「え？」

その言葉と同時に試合終了のブザーがなる。

「えええ――――――――」

試合終了のブザーが鳴り、その事に呆然としているオルゴットを尻田にアリーナのビット内に戻ってきた

「まともに戦わんか……」

との声と共に振り下ろされる出席簿。甲高い音と共にシールドエネルギーが減った。

俺が試合を始めて最初にシールドエネルギーを削ったのは織斑先生だった（笑）

「まともに戦つてボコボコにされて来いと？嫌ですよ俺、そんな事」「だからと言つてもっとマシな戦い方があつただろう」

「……ハア。次回があつたらそつします」

そこで織斑先生との話を切つて一夏に聞く。

「一夏、専用機は来たのか？」

「え、ああ。四五六の試合が始まつてすぐに来たけど……」

「そつか。なら一次移行も済んでるか。じゃあがんばれよ

試合は20分もあつたんだ。原作みたいに戦いながらするよりも簡単に終つてるだろ？」

「……あ」

「一夏のやの話を聞くまでそいつ思つてたんだけだなあ。

「……おー」

「……」めん、一次移行出来てないです」

「俺の試合、20分近くあつたよな。内容も田を離せないような内容じゃ無かつたよなあ」

「はー、そうです」

「なら、何で一夏君は一次移行してないのかな?俺にわかる様に話してくれるかな」

ガクガクブルブル。そんな擬音が聞こえてくるよつなほど震えながら怯える一夏。

「……ハア。もうここや。わざと行って来い」

「……」めん

「なら、カツ！」よべ勝つてこよ。それでチャラにしてやるよ

「……わかった。四五六、行って来る」

「おー。行って来い」

その後の試合はほぼ原作通りに進んだ。違うとすれば、一夏が負けたのではなく僅差で勝ったというところか。一夏の残ったシールドエネルギーは4だけだったからな。

その後、クラスで一夏の代表決定記念のパーティーが行なわれたが俺は最初の乾杯だけ付き合ってそのあとこっそりと抜け出した。

人ごみ、と言うかああいうわいわいと騒ぐのは苦手なんだよね。騒ぐなら気の知れた数人で騒ぐ方がいいからな。

抜け出して向かったのは屋上。夕日が沈み暗い夜空だったが気にしない。

さて、今回の試合で俺と一夏の印象は大体決まった。地味で卑怯で意気地が無い俺と、カッコよく正々堂々で意気地がある一夏。

どちらに人気が出るかなんて一目瞭然。これで今後も地味に過ごしていけば俺の事なんて気にするような人は少なくなつていくだろう。……これでいい。このまま地味に過ごしていく事が俺の平穏に繋がるんだきっと。

そう思つていたら屋上のせいか突風が吹き目眩が入り涙が出て。取ろうとして目を擦るもなかなか取れない。

「クソッ！」

そう悪態をついていたら

「……四五六君？」

「簪さんが俺の名前を呼んだ。……ん？」

「か、簪さん！？何で此処に……？」

「……四五六君のクラスの人に君が居なくなつたから知らないかつて聞かれたから探してたの」

「あ～、黙つて出てきたからなあ。迷惑掛けちゃつたな」

田を擦り軽く笑う。

「……」

「？。簪さん、どうしたの」

「四五六君」

「え、な……」

「ちよ、何して……」

名前を呼ばれたと思つたら頭を引つ張られ、簪さんの胸に抱きしめられた。

「私は何も聞かない。だから泣いてもいいんだよ」

「え？」

「私は今日の試合で四五六君がどう戦つたのは知らない。でも負け

たつて事は聞いてる。織斑君が勝つたつて事も

「……」

「でも悔しかつたんだよね。織斑君は勝つたのに四五六君は勝てなかつたことに……」

そういうふうに強く抱きしめる。

「……私にも少しそういう気持ち、分かるから

やさしく微笑み、頭を撫でまるで赤子をあやすよつとする簪さん。

「だから、今だけは泣いてもいいんだよ

簪さんの心臓の音が聞こえてくる。とても女らしさの気持ちになれ  
る。

がーー！

勘違いだから！！その思い、勘違いだからね！？

裏 その2（前書き）

本音ちゃんと簪ちゃんの口調が分からぬ。

## 裏 その2

今日、このIIS学園は異様な雰囲気に包まれていた。

何故か？それは今日イギリスの代表候補生と世界に一人だけの男性IIS適合者の試合が行われるからだ。

私は多少興味が引かれたが見に行く事は無かつた。なぜなら、男性の片方のせいでの私の“この子”の開発が途中で止まってしまったからだ。

分かってはいる。“この子”と片方の男性、織斑一夏の専用機の開発ではどちらが優先されるかなんて。……分かってはいるけど、納得は出来なかつた。

だから、私はクラスの皆や他のクラスの生徒が見に行つている間私は部屋で一人、パソコンの前で“この子”的調整をしていた。

調整をしていて気が付いたらお昼の時間になつていた。ふと部屋の机の上を見てみると其処には彼が作ったお弁当が置かれていた。

最近の私は彼のお弁当のせいでお昼になるとお腹かが空くようになつてしまつた。……完全に餌付けされてる気がするのは気のせいじゃない気がする。

彼のお弁当を食べながら、ふと考へる。

(そういえば、四五六年はどうやって戦うんだろ？)

彼に対する専用機の開発、と言つ話は聞いたことはないから必然的に彼は量産機で戦うという事である。専用機持ちかつ代表候補生相手に量産機に乗つた素人が勝てるはずなんかない事なんて、考えればすぐに分かることなのに彼のクラスの先生は何を考えているのかしら。

でも、今日彼が部屋から出て行くときに今日の試合の事を聞いてみたら「まあ、何とかして見るよ」って苦笑しながら言つてたから、きっと彼も勝てないことはわかつてたんだと、そう思つてしまつた。

でも、それは間違いだつた。彼だつて男の子なんだ。負けることが悔しくない、なんて事なんてあるわけが無かつた。私が“あの人”に勝てなくて悔しい思いをしてるみたいに……。

外が暗くなつてきた頃、ノック音が聞こえてきた。こんな時間に誰？と思つて開けてみると、私の幼馴染の布仏 本音が来ていた。

「どうしたの？こんな時間に」

「かんちゃん。じゅーちゃん、帰つてきてない？」

「じゅーちゃん？」

「四五六君？まだ帰つてきてないけど、どうかしたの

「うん。今私のクラスでおりむーの代表決定記念のパーティーしてたんだけどじゅーちゃんが居ないのに気が付いて探しにきたの」

「そうなんだ。……本音のクラス代表は織斑君に決まつたんだ」

「うん……おりむーす」カツコよかつたんだよ……」

裾を振り回しながら話しあう本音。

「最初は一次移行が出来てなくてやられつ放しだつたけど一次移行が出来てからはこう、ビューンていつてバーンって戦つて、最後はギリギリだつたけどセッサーに勝つちゃたんだよ……」

「一次移行できていない状態で戦つて戦闘中に一次移行したの……  
非常識」

一次移行も出来ていいのに戦闘を始めるつて、馬鹿なのかしら  
？教師も見ていいで止めれば良いのに。

「なら四五六君の試合はどうだったの？」

何気なく彼の試合の事を聞いてみたとたん、氣まずい雰囲氣を出  
し始める本音。

「その、『ルーカちゃんは……』

言ごづりこよひに言つ本音を見て私は悟つた。

「……四五六君、負けたんだ」

「……うん」

「そつか……わかつた。私も探して見るね」

「ありがと、かんちゃん。私は食堂付近を見てくるから、かんちゃんは屋上あたりから当たつて見て」

「わかつた」

そうして本音と別れ、彼を探しに行く事に。そうして屋上に出るドアのガラス越しに彼の後ろ姿が見え呼ばうと思いドアを開けた瞬間彼の口から「クソツ！…」という声が聞こえ、目もとを「じりじり」と拭いでいる姿が見えた。

拭きながらも彼の体は小刻みに震え、目もとを拭いでいる姿は泣くのを必死に堪えているようにしか見えなかつた。

その姿を見たとき、私は思つた。彼は悔しかつたんだつて。

たとえ専用機持ちの相手とは言え負けた事が悔しかつたんだつて。本音の様子からしてたぶんボロボロにされたんだと思う。それでいてもう一人の男性である織斑君がギリギリとはいえ勝つた事が悔しかつたんだ。

そんな彼の姿を見てしまつた私は殆ど無意識の内に彼の前に出て、気が付いたらまるで小さな子供をあやすように彼を抱きしめていた。

彼が泣く事を必死で堪えている姿を見ていると昔の私を見ているようで、それがとても悲しく思えて、私は彼が少しでも気が楽になるようじよじよと、やさしく抱きしめた。

男性を自分の意思で抱きしめるのは恥ずかしかつたけど、それよ

り彼が泣くのを堪えている姿を見るほうが辛かつた。

……どうして辛い、って思ったのかな？

## 裏 その2（後書き）

おや～。四五六君は気にしていなこの周りの雰囲気が怪しくなつてきただも。

以下、本音が最初に簪のところに尋ねてきたときに書いていた文章外が暗くなつてきた頃、ノック音が聞こえてきた。こんな時間に誰？と思つて開けてみると、私の幼馴染の布仏 本音が来ていた。

「どうしたの？」こんな時間に

「かんぢやん。『じゅーぢやん、帰つてきてない？』

「『じゅーぢやん？』

「『じゅーぢやん、だからじゅーぢやん』

「四五六君？まだ帰つてきてないけど、どうかしたの」

「うん。今私のクラスでおりむーの代表決定記念のパーティーしてたんだけど……」

其処まで言つて俯く本音。普段の彼女と違い何処か暗い雰囲気を纏つていた。

「パーティーがどうかしたの？」

「パーティーは関係ないの。ただ『じゅーちゃん、乾杯しただけですぐに教室から出て行っちゃって……』

其処まで話してまた俯く本音。

「本音、どうしたの。さつきから何か変だよ」

「……かんちゃん……」

「あや」

急に私に抱きつき頭を埋める本音。

「ど、どうした「私、私クラスが恐い……」え？」

「『じゅーちゃん』って私のクラスの生徒なのに、皆『じゅーちゃん』が居なくなつたのに誰も気にしないんの。皆『じゅーちゃん』がまるで最初から居ないみたいに振舞つて、『じゅーちゃん』を気にしないの」

「本音……」

「私嫌だよ。『じゅーちゃん』って私のクラスメイトなのに皆居ないよつこ扱つんだ……私、私恐くてたまらないよつ」

「こんな感じで何か変な方向に走り出したので消した。何がしたいん

だ俺の頭は？

## その9（前書き）

前話に書いてあつた没案の方が人気が高い、たゞ……

簪さんの胸の中、温かいナリー……って違う……

ど、どうする……このまま誤解されたままではばれた時ヤバイ、  
システムさんに殺されかねん。かと言つて振りほどくわけにもいか  
ない。内気な彼女がここまでしてくれているんだ。無理に振りほど  
いたら彼女を傷付けかねん。それは出来ないよ。男として。

ならば、取る方法はただ一つ……

「四五六君?……寝ちゃつたのかな

氣絶有るのみ!!

(うつしてメガネが無い四五六君つて結構カツコいいかもーー)

「ハツ……」

気が付いた時俺は自室のベットの上で寝ていた。時計を見ると朝  
の4時過ぎ。どうやら氣絶した後にここまで運んでくれたようだ。

(はー。こしても昨日はビックリしたなー。まさか彼女があんな事  
してくれるなんて……)

そう思いながら静かにベットから抜け出し、部屋にあるキッチン  
でお弁当の準備を始める。

（原作ではそんな事出来るような人物じゃなかつたような……いやいやいかんなこの考えは。彼女はもう空想の人物じゃなくて実在の人物なんだから、こんな考え方は失礼だよな）

考え事に耽つても体は勝手に動き、手際よくお弁当を一つ作つていた。

「よし、こんな所かつて何だこれー!？」

出来たのは無駄に豪勢なお弁当だった。

「……どうしよう、これ」

普段通りに朝食を済ませ、教室に向かつ時簪さんは珍しくもう起きていたので、部屋から出て行くとき、「……昨日は、その、ありがとうー」と、とりあえず感謝の言葉を出して出て行つた。

部屋のドアを閉めるとき、何か沸騰した時の音が聞こえた気がしたが氣のせいだろう。

さて、教室に着きいつも通りに授業が始まりお昼になつた時、即座に教室から離脱しようとしたら、「お待ちになつて、一一三さん!」と大声で呼び止められた。

振り向くと、其処には少し緊張した表情で立つてゐるオルコットさんの姿が。

「……えつと、何か?」

「あの…… — — — わん、以前の失言、申し訳ありませんでした！！」

そう言い、深く頭を下げるオルコットさん。

「ちよ、何を……」

「これはセシリア・オルコット一個人として、そしてイギリス代表候補生として正式に — — — 四五六さんに対する謝罪を申し上げているのです」

頭を上げ頭を合わせ言い放つオルコット。

「どういった事だ？」

「セシリアは昨日のパーティーが始まつてから皆の前でこの前言つた事に対して謝罪したんだよ」

「織斑……」

「私は一夏さんと出会つたまで、その、女尊男卑の思考に染まつてしまつていて男だから、そんな事だけで相手の事を見る事もせずに見下してしまつた。でも一夏さんとの試合で私はその考え方を改めました。このような考え方では — — — わんに指摘された通り、私だけではなく祖国の品位すら落としかねる、と」

涙ぐみながらが話すオルコット。

「ですから、今更かも知れませんが誠に申し訳ありませんでした」

そして再び深く頭を下げるオルコット。

「いや、その、頭を上げてください、オルコットさん。オルコットさんがこうして謝罪をしてくれたなら俺は気にしてませんから」

「……さん……ありがとうございます」

オルコットさんは周りのクラスメイトに「よかつたね」とか言われながら慰められていた。

つてかここで「その謝罪、お断る……」等と言いでもしたら今後の生活に多大なる支障が出るからな。……それに“俺”は気にしていないよ。まあ、周りの人たち、特に政府とか面子が大事な人たちがこのことを知つたらどうなるかは知らないけどね。

「……そうだ！四五六、今日は一緒に食事しないか？」

「……え？」

「ほら、四五六つていつも毎になるとどうかって、一緒に食事したことって無かつたからさ」

「それは……」

「な、いいだろ」

何故かキラキラと目を輝かせながら言つてくる一夏。

「……ハア、分かった。一緒に食事しようつか。」

「やつか! ならセシリアと雛も早く行け! せがへーーー!」

「」へ普通にオル「シトと篠ノ之を連れて行こうとする一夏。

「おー、織斑」

「なんだ?」

「オル「シトさんと篠ノ之さんも一緒になのか?」

「ああそりだよ。飯は一緒にの方が美味しいだろ?」

「何言つてるんだ、と言わんばかりの表情で返事をする。

「……ハア」

「?」

何故俺がため息をついたのか解らないといつ表情を浮かべる織斑を引きつれ、食堂に着く4人。

「何食べよっかな~」

「先に席、確保しておぐれ」

「おー、つて四五六、食券は?」

「俺は弁当だよ」

「やうなのか……なら早く行くな」

そうして席を確保して、少ししたら3人が来た。

「待たせたな」

「待たせましたわね」

「すまない、遅くなつた」

「気にするな」

そうして3人が来たので俺は鞄から弁当箱を取り出す。

「かなりでかいな、いつもそんなに食べてるのか?」

「いや、食材が痛みそうだったから使い込んだらこいつなつただけだ」

「ふうん。少し貰つてもいいか」

「良いぞ」

そうして蓋を開けたら

「なん、だと……」

「まあ」

「美味しそうだな～」

三者三様で驚かれた。

「卵焼きで良いか？」

「おひーー。」

織斑にとりあえず卵焼きをあげる。

「もぐもぐ……すっげ、メッチャうめえーー！」

「やうか？」

「ああ、まじで美味かつたよ」

「それは何より」

「それでもぐもぐと食べていたらオルコットさんと篠ノ瀬さんがこちらを見ていたのでしょうがないから、から揚げと、ミーハンバーグをお裾分けした。」

「えつと、よろしくので？」

「いいよ。と言つか食べ切れそつにないからどうぞ」

「すまんな、ではいただく」

二人とも俺のおかずを食べた数秒後、撃沈した。

「え、エラかった。不味かったか」

「……え、とても美味しかったです」

「……ああ。おしかった」

「なら、いいんだが……」

（（男性なのだけれどおいしい料理が出来るなんて……））

なにやら一人ともぐこんでいた。

さて、いろいろあつたがこれにて一件落着として、明日から地味な生活に戻れると思つていたら「生徒会から呼び出します。一年一組、一二三四五六君。一二三四五六君は至急生徒会室に来てください。繰り返します。一年一組へ」と呼び出された。

「めん。簪さん。もう君にお弁当は作れないかも……」

その9（後書き）

セリフで一人多いのは篠ノ井空氣や、うわ何をする、やめ（rn

## その10（前書き）

樋無さんの口調と性格が把握できない。

そのせいでもうなつた。

今俺の田の前でにこやかに笑っている女性、名前を更識 楠無といふ。

彼女は簪さんの姉であり、日本お抱えの暗部「更識家」の現当主である。性格は明瞭快活で文武両道、掃除に家事、料理に裁縫、更にはE-S関係の知識も豊富で専用機を作り上げたことも。

プロポーションも女性として魅力的な体を持ち、まさに完璧超人といつても過言ではない、と言つ原作でハイスペックを地でいく人だ。

ただし、シスコン。

そんな人が俺を呼び出した理由なんて、一つしかない。

「こいつして実際に会うのははじめてかしい。簪ちゃんの姉の更識楠無よ」

「えっと、はじめまして。簪さんのルームメイトをしていく――――四五六です」

「私の名前も珍しい、と思つてたけど貴方のはもつと珍しいわね」

「よく言われます」

「いままではにこやかに話が進んでいるが、この後からが問題な気がする。」

「…… わたし、 今日「」に呼び出された理由、 わかるかしりへ。」

「…… 先日の試合、 の事ですか」

「 そうね、 それも有つたわね」

それも? 」

「 では先にそのことから話し始めましょうか」

「 はあ……」

其処から、 試合内容についてクドクド言われたが、 まあ樋無さんも素人が真正面から代表候補生に戦いを挑む無謀が分かっているようで大した事は言われなかつた。 ただ他の方法が無かつたのか、 と言わねば、 ぐりいだつた。

「 …… 」のぐりいかしらね、 生徒会長として貴方にいう事は

「 わたしですか…… 生徒会長として? 」

「 わたし、 」までは生徒会長としてのお話。 これから話すのは更識  
齋の姉として話すことよ」

其処から急に顔つきが真剣になり、 場の雰囲気もかなり変わつた。

「 」の話をする前に、 」の学園の警備の話をしなくてはならないの

「 ? 」

「『』の学園は世界中からE.S.関係の生徒や技術者が集まつてくるの。そのため警備関係もかなり厳重になつてるのは分かるわね」

「え、ええ」

徐に立ち上がり俺の周りを回りながら話始める。

「警備の関係上、監視カメラもこの学園中に設置してあるわ。無論プライベートな場所、トイレとか浴場は別だけど」

「はあ……」

「そして、監視カメラがある場所に“屋上”も含まれてるの」

「……」

『』の時点では冷や汗が止まらなかつた。

「そして昨日、たまたま私が屋上の監視カメラの映像を覗いた時……」

バキイ、そんな音を上げて彼女の手の中の扇子が砕けた。

「……ねえ、四五六君。どうして貴方、簪ちゃんに抱きしめられてるのかな~」

俺の正面に立ち、俺の顔を両手で掴み顔を固定して至近距離で話す樋無さん。その目は暗く濁つており輝きも無く、一言で言つながらヤンデレの目つきだった。

「あ、あれは……」

「あれは、何かな？私に分かるよつてシッカリとオシエテクレルヨ  
ネ？」

「この時点では俺は気を失いそうになっていた。何だこれ、何でこんな目にあつてるんだ。櫛無さんの手がめり込んで痛い。と言つた血が出てきてるんですけどおおーー

「あれは、簪さんが俺を慰めてくれただけです」

「慰めた？」

「そ、そうです。その日の試合で俺が勝てなかつたこと、その、泣きそうになつた所を簪さんが抱きしめてくれただけで、他意はありません！――

実際は田に「ゴミ」が入つて涙が出ただけのを簪さんが勘違いしだけだけど、いつも言つておかないとまずい気がする。

「ホントウかな？」

「ほ、本当です！――

「……」

「……」

そのまましづらぐの間見つめあへ。――で少しでも田を逸らしでもしたらきっとヤバイ。明日の田の出を見られなくなる気がする。

「……フウ、ビバやうの本郷のよひね」

やうこつて両手を離し手くれた樋無さん。

「痛つ」

手を離してくれたのはいいのだが、手の爪がめり込んだといから軽く血が出てた。

「あ、し、しめんなさい。今手当してあるわね」

手際よく傷跡を手当してくれた樋無さん。

「本郷にじめんなさいね、四五六君。私、簪ちゃんの事になるとどうしても制御できなくて……」

ショーンとして俯く樋無さん。

「いえ、大丈夫ですよ。そんなに深い傷でもないですから。」

「やうだけど……」

先ほどのヤンキーのよつた雰囲気は無く、今の彼女は悪い事をして怒られるのではないかと不安になつてゐる子供のよつた。

「フフ」

「な、なに。急に笑つて」

「いえ、さつさの櫛無さんと今の櫛無さんのギャップが可笑しくて」

「なー? も、もひ。お姉さんをからかわないのー!」

「ハハハ」

「わ、笑うな――――――」

「ポコポコと軽く叩いてくる櫛無さん。あれ、彼女ってこんなに可愛い人物だつたけ?」

「フウ、フウ……「ホン。話は変わるんだけど四五六君から見た簪ちゃんってどんな子かな」

「へ? どういふ事ですか」

「その、ね。私は簪ちゃんの事がとっても大事でとっても心配なんだけど、その、いろいろあつてね。直接話す機会がなかなか無くてね」

「何処か諦めたような顔つきで話す櫛無さん。

「……簪さんは普段はあまり話す」とはありませんけど、優しくていい子だと思いますよ」

「わ? ？」

「じゃなきや、俺みたいなのを慰めてくれませよ」

「わ? ？」

「そうですよ」

その後は簪さんの最近の状況を軽く話して、お開きになつた。

「『めんなさいね、こんなに引き止めちゃて。それに怪我もさせちゃつて』

「いえいえ。それだけ簪さんのことが心配なんだって分かりましたから」

「そう言つてくれると助かるわ」

その時の彼女の顔は妹を心配する姉、そう完璧超人などではなくただの普通の女性だつた。

「簪さんとの仲、よくなると良いですね」

「ええ、そうね」

「では、失礼します」

「今日は、『めんなさいね』

「いえ、もう気にしませんから」

そうして、生徒会室から出て行く俺。

フウ。……生きた心地がしなかつた。だってあの人ヤンデレっぽくなつてた時後ろに何か専用機っぽい物がゆらゆらと見えてたもん。

下手な回答したらきっと消されてたかも。

でも、まあこれで取り合えず危機は去ったかな。簪さんにちょっと  
かい出さなければ何もしてこないだろうし。俺簪さんにちょっとかい  
なんてして……して……。

俺、餌付けしてた。 Bieber。

その10（後書き）

妹LOVEな楯無さん。

その思いは彼女から目の輝きを奪つほどである。

## その11（前書き）

更識姉妹ルート（ただし、失敗すると一人ともヤンデレになります）  
布仏姉妹ルート（ただし、キャラが把握できていないので会話が少なくなります）

NTRルート（寝取りルート。一夏ハーレムの誰かを寝取る。失敗すると主人公勢が敵にまわります）

孤独ルート（ヒロイン無し）

この作品がゲーム化したら作者はこうするんだ。

生徒会からの呼び出しが終わり、教室に戻り席に着く。後ろのドアからこつそりと入つてこつそりと席に着いたおかげで誰にも気づかれていない。

フフフ、地味スキルは着々と向上しているようだな。

そんな風に悦に浸つていたら、クラスの皆の話が聞こえてきた。なにやらクラス代表戦の事で盛り上がっているようだ。……という事は

「その情報、古いよ」

来ました。セカンド幼馴染こと、ちつぱい、じゃ無かった鳳 鈴音。原作では初期から登場している物のクラスが違う事で何かと不憫な目にあつている子です。

その後は織斑先生の登場で何か小物っぽいセリフと共に戻つていい彼女。今思つたんだけど、彼女、廊下で入るタイミング計つてたから授業開始ギリギリに登場したのかな？

廊下で聞き耳を立てながら入るタイミングを計つてる代表候補生。  
……シユールだ。

その後いつも通りに授業が進みお昼の時間になつて、すぐさま教室から離脱した俺。昨日のように一夏と一緒に食事をする気は無いのだ。それに今日、彼女が起こすイベントに巻き込まれたくないからな。

そうして来ました。俺がいつも食事している隠れ家的な場所。これは木や校舎等で普段は暗いのだがお昼時、つまり日が一番高くなる時だけ一部份だけ日が当たる場所があり、俺はいつもそこで食事をしている。

「そこ、寂しい奴とか言わない。こうした日々の小さな努力が後々大きな意味を出すんだ。そう思っていたら

「お先に失礼してるわよ、四五六君」

地面にシートを広げ笑顔で座っている生徒会長に姿が。

「……何故、ここに？」

「此処わね、私のお気に入りの場所なの。最近はちょっと忙しくて来れなかつたんだけどね」

「……さいですか」

「ここ」でコターンしても厄介事になるだらうと諦めて、「失礼します」と一言掛けてシートに座らせてもらひ。

「ふふん。此処に目を付けるとは四五六君なかなかやるわね」

「いえいえ、たまたま見つけただけですよ」

「そう?」

「そうですよ」

そんな会話をしながら俺はお弁当を出す。

「それ、四五六君が作ったのかしら？」

「ええ。俺の手作りですよ」

「……」

俺の作ったお弁当の中と自分が作ったお弁当の中を見比べる樋無さん。

（何かじら、）のまゝの無敗北感は……）

「どうかしましたか？」

「えー？ 向でも無このよ、何でも」

「そうですか

不思議に思いながらも、「いただきます」と言ひながらお弁当を食べ始める俺と樋無さん。

「その卵焼きおこしあうね

「なら、そのから揚げとなら交換してもよこ下さいよ」

おかずの交換をしたり。

「……悔しい、でもおこしこ」

「何が？」

俺の卵焼きを食べた感想を聞いたり。

「食後は紅茶よね」

「いや、緑茶でしょ」

食後の飲み物で言い争つたりしながら、お皿が過ぎていった。

「……ふう。いつもお皿を食べるのも久しぶりね」

「忙しそうですからね。生徒会長つて」

「せうよー、せういのよー生徒会長つて」

ぐうたれた感じになつて話す樋無さん。

と言つた、樋無さんてこんな感じだったけ？人をおちょくるのが  
趣味の人だと思つてたんだけど。

「ひつじると普通の女の子ですね」

「だれが~」

「樋無さんが」

「……へ？」

キョトンとした表情を浮かべる樋無さん。

「生徒会室で話したときや、今一緒にお昼を食べた時の樋無さんは普通の女の子ですね」

「な、な、な」

顔を赤くしながら驚く樋無さん。

「なに、言つてゐのかしら四五六君は。私は生徒会長で工学園最強なのよ。偉いのよ」

「そうですか？妹の事を心配したり、今みたいに一緒に食事をした  
限りでは樋無さんは普通の女の子じゃないですか？」

「な！……フウ。四五六君と一緒にいると何でか調子が狂うわ」  
「そうですか？」

「九月、ノルマニ」

苦笑しながら、言う樋無さん。でもその顔は何処か嬉しそうだつ

た。

「さてと、私は先に失礼させてもらいつわね」

「仕事ですか？」

「生徒会長は忙しいのよ。四五六年君」

「忙しいのは分かりますが、程ほどにしないと体、壊しますよ」

「あら、心配して貰れるの」

「当たり前ですよ、樋無さんは女子なんですから」

「うーーー。」

“女子”その言葉を聞いた樋無さんは何故か目を潤ませた。

「え、どうかしましたかーーー？」

「な、何でもないわ。そ、それじゃあ私は仕事があるからバイバイ」

そういうて駆け足で、走り去る樋無さん。

「何だったんだ？」

## その1-1（後書き）

ダメだ、生徒会長のキャラがつかめない。気が付いたら普通の女の子になつてゐる。

前話の没案を晒して見る。

ヤンデレモードが続いた場合。

「あれは、簪さんが俺を慰めてくれただけです」

「慰めた？」

「いや、そうです。その日の試合で俺が勝てなかつたこと、その、泣きそうになつた所を簪さんが抱きしめてくれただけで、他意はありません！」

実際は田に「ヒミ」が入つて涙が出ただけのを簪さんが勘違いしただけだけ、いつまつておかないとまずい氣がする。

「ホントウかな？」

「ほ、本当です……」

「……」

「……」

そのままでいたいのを見つめあつた。」少しでも田を逸らして  
もしたくないとヤバい。明日の田の庄を見られなくなる気がする。

「……フウ、エリヤー本当にいいな

やうにって両手を離し手くれた櫛無さん。

（はあ～。助かったのかな？）

「……でも、おかしいのよね

「……え？」

「簪ちゃんが優しいと言つても同じ部屋なだけの貴方が泣きやつくなつてたから、つてだけで抱きしめるとは思えないのだけど

「……そ、それはムグー？」

気が付いたときには俺は座つている椅子に縛り付けられていた。  
水によつて。

（これは……）

「……ねえ、四五六君。本当に貴方、簪ちゃんに向もしてないの？」

「ムー、ムー」

首を振り必死に抵抗する俺。だが

「ねえ、どうして話してくれないのかな？……何かやまじい事でも

あるのかな?「

再び俺の顔に両手を当たしてくる樋無さん。両手の部分だけエラを展開しながら。

「ねえ、どうして、どうして話してくれないの!? ねえ、なんで!」

少しづつ樋無さんの指が頭にめり込んでくる。

「どうして、どうして、貴方は簪ちゃんに抱きしめてもらっているの。何で私じゃなくて貴方が抱きしめられてるの?」

「ア、ガガガ」

「ねえ、答えてよ。答えなきこと!」

薄れていく意識の中、最後に見たのは輝きが無くなり濁った目つきをしながらも涙を浮かべ何処か怯えている表情を浮かべた樋無さんの顔だった。

つまり、ヤンデレモードが続いた場合、四五六君は死んでいたんだよ!?

## 裏 その3（前書き）

ピロイン 新しい攻略ルートの条件が公開されました。

生徒会ルート 条件 更識・布仏姉妹ルートのグラフィックを100%にする事。

更識姉妹と布仏姉妹によるハーレムが展開されます。ただし4人全員の愛情度を均一に上げれなかつた場合、齶ENDになります。

誰得！？一夏ルート 条件 NTRルートで篠、セシリ亞、鈴、シヤル、ラウラの順番で攻略し、BAD ENDを見る事。

誰かのヒーローになる事を諦めヒロインになる事を決意するルート。  
一週目は女装、二週目からはTSになります。

年上のお姉さんルート 条件 孤独ルートで千冬、真耶、クラリッサのみ友好度をMAXに上げる事。

精神が肉体の年齢に有つていかない為、年上にしか興味が持てれなくなつてしまつたルート。年上のお姉さんに甘える事が出来ます。

## 裏 その3

私が彼の事を意識し始めたのは、始めて彼と話をした時かしらね。

その日、私はたまたまIS学園の防犯カメラの映像を見ていたの。これは定期的に行なっている事でその日は生徒会の仕事も、裏関係の仕事も殆ど無いという珍しい日だったのを覚えてるわ。

防犯カメラの映像と言えど、IS学園中に設置されているカメラの数は数百以上ありその全てを確認する事は出来ないので、生徒が居ない時間帯や、人つ気が無い場所などを中心として確認していたの。

その画像を見たのは本当に偶然だった。初めて見たときは自分の目を疑つたわ。……だって、あの内氣で大人しい簪ちゃんが人を、しかも異性、つまり男性を抱きしめてるんだから。

しばらくの間私は呆然としていたわ。そしてその後、恥ずかしい事に物凄く嫉妬してしまったの。なんで、抱きしめられているのが私ではなくて見知らぬ誰かのかつて。

この抱きしめられている男性が四五六君だというのはすぐに分かつたわ。彼が入学してくる前に顔写真を見たからすぐに分かつたの。それに、簪ちゃんのルームメイトっていう事もあるからね。

私はすぐさま、彼を生徒会室に呼び出したわ。彼がどうして簪ちゃんに抱きしめられていたかを聞きだすために。ついでに先日彼が行なつた試合の事についても言つておくために。

彼が生徒会室に入つてきて実際に見た感想は、地味、ただそれに限るわ。身長や顔つきは悪くは無いと思うのだけど、黒髪黒目黒縁

メガネが彼を地味にしていたわ。彼が用意していた席に着いてからまずは自己紹介をして先に先日の試合の事から話させてもらった。私としては彼の取った行動に対して何か異論を唱えるつもりは無かったの。専用機持ちの代表候補生に対して素人が量産機で試合をしても正攻法ではまず勝つ事は不可能。故に彼が取ったスマーケグレネードを使用した行動は評価してもいいと思うの。それがよかつたかどうかは別として。

しばらくの間、彼に試合の事で軽く注意と言つか評価と言つかそんな事を話、その話が終った後、私は生徒会長としてではなく、更識簪の姉、更識楯無として彼と話をしたわ。いえ、あれは話と言つよりも尋問と言つた方が正しいわね。

生徒会長としての私の時はまだ自制が効くのだけど、姉としての私は自制が効かない事が多い。特に簪ちゃんの事が関わってくると。

そのせいで彼に軽くとは言え、怪我を負わせてしまった時私は表情には出さなかつたけど、酷く怯えたわ。もしこの事を彼が簪ちゃんに言つたりしたらどうなるかって。でも彼はそんな風な態度は取らずに逆に今の私とさつきまでの私とのギャップが可笑しいって笑うのよ。怪我をさせたのに……

最後に彼から見た簪ちゃんの印象を聞いてから彼と別れ、一人生徒会室で考えて見たわ。彼は簪ちゃんにとつて害が有るかどうかって。簪ちゃんに話さず勝手に彼の事を害が有るかどうか考えている私は酷く滑稽で、無様だったと思う。でも私は簪ちゃんと正面から向き合うだけの度胸が無い。

笑えるわよね。IS学園最強、ロシアの代表操縦者、対暗部用暗部「更識家」現当主、どご大層な肩書きを持っているのに実の妹一人と向き合えないなんてね……

次に彼と出会ったのは私が息抜きによく使っている、秘密の場所だつたわ。この場所は普段は日陰で薄暗いのに、お昼時だけ一部分だけ明るくなりその場所で一人になるのが私の息抜きだつたの。

この時だけは、余計な肩書きを捨てて、ただの更識権無になれる唯一の場所だつたから。

そんな場所に彼が入つてきた時は心底驚いたわ。その驚きを顔と態度に出さなかつたのは本当に自分自身を褒めてあげたかっただけだわ。

そうして、入つてきた彼を追い出すわけにもいかず仕方が無く彼と一緒にお昼を食べる事にして、彼が取り出したお弁当の中身を見て、ショックを受けたわ。

此処でお昼を食べる時は自分でお弁当を作つて持つてくる、と決めていてそのお弁当は手抜きなどしてなかつたのだけど、彼のお弁当は私が作ったお弁当の数段上を行くものだと見てすぐに分かつたわ。

失礼だけど地味な彼がこんなにもおいしそうなお弁当を作れるとは思つていなかつたから……

そうして始めた二人だけの食事はいつもよりもおいしく感じられた。……此処ではいつも一人でお弁当を食べていたのだけど、息抜きにはなるけど、それだけだつたから。

彼とお弁当のおかずを交換したり、食後の飲み物口論したり、今まででは考えなかつた事を彼と一緒にして、とても楽しかつた。普通の女の子のよう振舞える事が……

私は「更識家」当主になるべくして幼い頃から厳しく育てられて

きた。それこそ周りの同年代の女の子が遊んでいる時、私は厳しい訓練をしていた。その事に対しても別に不満があつたわけではない。「更識家」に生れてきた時点で私が普通の女の子として生活が出来るはずが無いと、幼い頃に自覚してしまつたから。

そう、私は普通の女の子ではなく、「更識家」当主として、IS学園最強として常に人の上に立たなければいけないのだ。

なのに彼は私を普通の女の子として扱う。それが私にとって、どれだけ得がたい物なのか、そしてどれだけそうされたかったのか、まるで初めから知つていたかのように。

私は彼が恐い。このまま彼と一緒に居たら私は、「更識家」当主と言つ仮面を取られ、ただの普通の女の子になつてしまつのが恐い。でも、心の何所かでそれを望んでいる私がいる。だから私は彼と会う事を止める。……止めたいたのに、私の体はあの秘密の場所に向かつてしまつ。

なぜなら、彼と二人で話している間だけは、私は当主でもなく最強でもなく、ただの女の子で居られるから……

裏 その3（後書き）

う、ん？会長様にフラグが立つたぞ。

四五六君は普通に過激しているだけのはずなんだけどなー。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8610y/>

---

IS 転生して貰ったのは！？

2011年11月29日22時18分発行